

上十条一丁目路地園芸トライアル

第1回ワークショップ 江戸の園芸を知る

講師：賀来 宏和 氏

株式会社グリーンダイナミクス代表取締役

- 講演 「世界一の江戸園芸」
- ・ 100年ぶりに訪れたガーデニングブーム
 - ・ 世界を凌駕した江戸園芸
 - ・ 江戸園芸の特徴
 - ・ 将軍から庶民への300年
 - ・ 外国人が驚嘆した江戸の町と人
- ビデオ上映 「大江戸花暦」(浜名湖花博)
- 質疑応答

平成18年2月21日(火)

13:30～15:45

上十条一丁目西町会会館

講演 「世界一の江戸園芸」

司会：木村

みなさん、こんにちは。今日は寒いなか、お忙しいなかご参加いただきましてありがとうございます。路地のまち連絡協議会の事務局長という雑役をやらせていただいています、木村と申します。よろしく申し上げます。

日頃はあすみの会でも皆さんとは、花植えとか広場のお掃除とかで一緒させていただいていますが、今日は立場を変えまして、路地のまち連絡協議会の事務局ということで、皆さんにお集まりいただきました。

去年、路地のまち連絡協議会と、こちらにいらっしゃるあとでご紹介しますが賀来さんという園芸協会の方、それから都市計画家協会の美しいまちづくりプロジェクトの三者が運悪くどこかで飲んじゃったんですね。飲んじゃいまして、是非一緒にやろうなんていうことを勝手に決めた人が端っこの方にいるんですけども、いきなりやるんだということで、事務局長おまえがんばれということでやってきました。今回上一西町会の皆さんのご協力を得て、路地園芸トライアルということで、路地の園芸をカッコよくしていこうというようなことをやってみようじゃないか、ということでご協力得ることができてありがとうございます。ということで、本日は沖田さんの方から後でごあいさついただくとして、

沖田

あいさつはいらない。

司会

いいですか。では、今日講師に来ていただいているのは、グリーンダイナミクスの代表取締役をされている賀来さんです。

賀来さんは、もう一昨年になるんですかね、浜名湖花博のプロデュースをされた方です。花博は町会で見に行かれたそうですが、その総合プロデュースをされた方です。楽しい話が聞けるかと思しますのでよろしく申し上げます。

今日の予定ですが、一応お手元にお配りしている内容で、お話を先にして、後ビデオを見ていただくということにさせていただきます。では、あと賀来さんをお願いしてよろしいですか。

■自己紹介

賀来

みなさん、こんにちは。今日は町会の会館を使ってお話しをしますので、少し脱線しながらですね、わたしも立ったり座ったりしながらお話しをさせていただきたいと思っています。一応時間は1時半から4時ということですが、お互いにくたびれちゃいますので、まあ適当なところでみなさん耐えられないなと思ったら手を挙げていただいて、



ただビデオとかですね、いきなり話を止めるわけに行きませんので、できればもうダメだ
と思う30分前くらいに、もうそろそろやめる体制に入れとこういう風に言っていただ
ければ幸いです。

お手元に、賀来ってありますけれども、女優に賀来千賀子あの方も大分の出身なんです
よ、賀来っていうのは大分県にある名前です。わたしは九州の小倉生まれですけれど、
もともと父方が大分でございます。賀来千賀子のおじいさんになる人が大分の安心院（あ
じむ）というところにおりまして、遠戚、まあ親戚だろうと思っておりますけれども、まあそん
なことでございます。

先ほどご紹介いただきましたように、2004年の4月から10月までありました浜名
湖花博の総合プロデュースということで、全体の計画を足かけ7年ぐらいお手伝いをしま
して、なんとか540万人の方にご覧いただきました。去年は愛・地球博という万博がご
ございましたけれども、こちらの万博の中のお花も私どもの会社でお手伝いさせていただきました。
社員が4人ほど行っておりました。

そう申し上げますと花とか緑は詳しくて後でいろいろと質問をしようかなということがあ
ると非常に困るものですから、というのは、わたしはさほど、言っているほどには園芸は
よく存じ上げてはおりませんし、それからまじめな話をしますと、NHKの趣味の園芸と
いう番組がありますけれども、あの中でも解説者の説明に間違いを見つけるくらい皆さん
の知識の方が上回ってきている状況です。ということで今日は助手としてイケメンのお兄
ちゃんを連れてきておりますので、片山といいます。彼は植物のことよくわかりますし、
女性のファンが多い。何か植物についてわからないことがありましたら後でご質問いただ
ければ、と思います。

それから2回目以降皆さんと一緒にちょっと飾ってみようというときには、彼が先生に
なってわたしが助手の方になりまして、苗を運ぶのは私の方でお手伝いすると、こうい
うことでございます。

肩書きにありますように、都市環境プロデューサーなんていうのは適当に付けている名
前ですが、3つ目に英国王立園芸協会日本支部理事というのですね、英国王立園芸協会
というのには世界で一番大きい園芸の愛好者団体で、今イギリスがほとんどですけれど
も35万人会員がおります。実は昨日この会長さんがおみえになってまして、東京ド
ームでらん展がございまして、あの審査委員をおやりになっている関係でご夫妻でお
みえになっていました。

この英国王立園芸協会というのには王立でして、エリザベス女王陛下が名誉総裁
です。従って会長といっても貴族でよくありますよね、何々伯爵とか侯爵というの
がありますけれども、向こうでいうとサー(Sir)というのが付いているんですね。これ、江戸弁じゃあ
りませんよ。サー、サー何とかというのが付いてまして、偉い方のようにあります。
昨日も少しいろいろとお話しをしてきましたけれども、日本の支部も一生懸命が
んばっているというお話しをしたところでございます。

日本は全国で3000人を越す会員がいて、色々な植物を楽しんでいます。また、皆
さんも興味がありましたら英国王立園芸協会日本支部というのがございますのでお
問い合わせをいただければと思っております。

じゃあ今日の本題についてお話しをしていきたいと思っております。立ったり座
ったりしながら

ら、よろしいですか。

沖田

その椅子を使った方が、立ち座りが楽じゃないですか。

■ 100年ぶりに訪れたガーデニングブーム

◆ガーデニングブームを再起させた「国際花と緑の博覧会」

賀来

えー、ちょっと高いところから申し訳ありません。

世界一の江戸園芸ということでお話しをしますけれども、100年ぶりに訪れたガーデニングブームということですね。ガーデニングという言葉、皆さんおわかりだと思いますけれども、だいたい世の中にこの言葉を流行らせたのは3人、俺が流行らせたという人がいます。

一人はかくいう私でありまして、1990年に大阪で国際花と緑の博覧会という大きい博覧会があったんですよね。この企画を昭和58年からお手伝いをしまして、こういう催しを通して今日言うところのガーデニングを流行らせたいなあということで、仕事を担当しました。

それから2人目は『わたしの部屋B I S E S (ビズ)』っていうお庭の雑誌があるんですよ。ここに八木波奈子さんという編集長がいらっしゃいまして、この方が「ガーデニングという言葉はわたしが流行らせた」とおっしゃっていますね。ガーデニングという言葉は1992年に流行語大賞になりました。ですからもう14年たっておりますけれども、その八木波奈子さんが、その流行の仕掛け人です。どういう風にしてどーんと流行ったかという、1992年に『わたしの部屋B I S E S』が、「チャールズ皇太子の庭」という特集を組みました。これが爆発的に売れまして、このおかげでガーデニングという言葉が流行語になったんですね。

またもう1人いるんです。これはアイリスオーヤマっていう会社知ってます？アイリスオーヤマってホームセンターに行くとき押し入れの収納家具あるでしょ、収納家具とかね、ペットフードとか、ガーデニング用の色々なプラスチックの鉢、これも作っている会社で。もともとは仙台でたった3人で創業した会社なんですけど、大山さんという社長がいらっしゃいまして、東京ですと広告看板が新橋の第一ホテルの付近にありますよね、あのすぐ脇のところにネオンサインがついています。第一ホテルの所有者じゃないですよ。ガーデニングのアイリスオーヤマっていうハートのマークみたいなネオンサインがついていますけれども、この大山社長も「俺が流行らせたんだ」ということでもあります。

◆国際園芸博覧会とは

こういうガーデニングなんですけど、まさに表題に書きましたように100年ぶりに日本に再来したということで、こう横文字で書きますから偉そうな気がしますけれども、決し



て豊かになって西暦1990年頃から始まった訳ではなくてずっと昔に大変なガーデニングブームがあったということでございます。このガーデニングブームの火付け役は何かということ、小笠原亮さんというNHKの「趣味の園芸」で時々講師されておられる方ですが、この方が『江戸の園芸 平成のガーデニング』という本の中にそのことを書いています。

◆アジアで初めての国際園芸博覧会「国際花と緑の博覧会」

小学館で出ていますのでご覧いただきたいですけれども、ここにこんなことが書いてあります。「日本のガーデニングブームの火付け役は、平成2年に大阪で開催された『国際花と緑の博覧会』だと思います。広大な場所を使って、平面的に、また、立体的にデザインされた植物が人間の社会にもたらす可能性をあれこれと提示して見せたあの花博は、日本の花文化を大きく転換させたと思います。」(資料1) ということで、ガーデニングブームは花の万博がどうも作ったということを書いていただいています。

こういう園芸博なんですから、いずれも19世紀の中頃、1800年代の中頃に色々な博覧会とかフラワーショーが世界で生まれています。アジアで初めて行いました博覧会がこの「国際花と緑の博覧会」、そして皆さん町内会でご覧いただきました「浜名湖花博」というのは我が国で3回目の園芸博覧会になります。

◆わが国で3回目の国際園芸博覧会「浜名湖花博」、その3つのねらい

この浜名湖花博なんですけど、3回目ということでいくつかねらいを込めて作っています。1つは庭文化の創造ということなんです。それから2番目が今日のお話の主題になります、わが国の伝統園芸文化の保存継承ということです。素晴らしい伝統があったんですけども、多くの方が忘れておられるので、これを何とか残してつないでいきたいというねらいであります。そして3番目にガーデニングブームで花や緑を楽しまれる方が非常に増えました、こういう方々に植物についての知識とか興味を一層深めていただくというのがねらいでありました。今日はこの2つ目のねらいに沿った、「浜名湖花博」の園芸文化館というのがございましたけれども、ここで行われたこと等についてお話ししたいと思います。

◆2つ目のねらいに沿った「浜名湖花博」の「園芸文化館」

そもそも「浜名湖花博」でなぜ園芸文化館というものをつくったかといいますと、江戸の園芸の大きな発祥になりましたのは徳川家康が非常に植物好きだったということですね。ということで1600年以降江戸、そして駿府城を行ったり来たりしておりますので、静岡とのご縁が特にあったということですし、現在でも伝統園芸、オモトとかですね、こういった伝統園芸は、現在、静岡県そして愛知県が非常に盛んであります。ということで静岡とご縁があるということです。

それから後ほど出るかもしれませんが、シーボルトという長崎に来ておりましたオランダのお医者さんがいますね、1800年代の後半に来ましたけれども、彼が『江戸参府紀行』という本を書いています。長崎から将軍に会うためにずーっと東海道を上ってくるんですね。そのときの物語を江戸参府紀行という本に書いています。

この中に「自分が見た最も美しい庭園は原の宿にあった」と書いてあるんですね。原の

宿というのは現在の沼津にある原の宿でありまして、ここに書いていますように帯笑園(たいしょうえん)というのが原の宿にありました。これは武士ではなくて商人あるいは庄屋さんだったと思うんですけれども、植松さんというお宅でありまして。ここに大変な植物が集められていたということがあります。ここでビデオ上映と書いてありますが、これは後ほど皆さんに見ていただくとして、2ページ、3ページに移りたいと思うんですけれども。

江戸の園芸と言うとですね、素晴らしいということですね、色々な方がおっしゃるんですけれども。なぜ素晴らしいかというようなことについて、ちょっとまとめてみます。

■世界を凌駕した江戸園芸

◆観賞対象としての園芸

もともと人類はいつ頃から花とか緑を楽しむようになったかというのはよくわからないわけですが、我々の祖先、人類の祖先でネアンデルタール人とかですね、直接の祖先じゃないんですけれども、もっと人間と猿の中間みたいな人類がおりますけれども。現在の湾岸戦争がありましたイラクにですね、ネアンデルタール人を葬ったお墓みたいなものがあります。このお墓の発掘をしますと、どうもお花と一緒に遺体が埋められていたということがわかるんです。それは花粉が残っているんです。分析をしますと花粉が残っていて、ネアンデルタール人は数万年前に埋葬されるときにお花を手向けられていたと、というようなことがわかったりします。

また、だからといって花が当時観賞の対象になっていたかどうかということはわからなくて、おそらく植物と人類とのつきあいというのは、食べ物から始まって次に動物のえさとかですね、それから衣料なんかをやるうちにだんだん野生からとるのではなくて栽培するようになりますね。そのうちに呪術ですとかね、今日でいうところの医療とか、お医者さんですか、保健とか、そういう意味合いで植物が使われるようになって、そのうちだんだん見るような対象になったんじゃないかとか言われています。

◆東洋と西洋の二大潮流

こういう風に見るようになったのは、誰が初めに見たか何ていうのはわかりませんが、大きく地球規模で見ると東洋と西洋と全然違う発達があるんです。ヨーロッパ、西洋の方ではですね地中海といいますか、エジプトとかね、ちょうど今植物があまりなくなって砂漠になっていますけれども、あの場所は昔は実は植物があったんです。レバノン杉なんてありますけれども、今レバノンに行ってレバノン杉なんてほとんどないです。でも昔はうっそうとしていた森だったんです。森を切り開いて文明化しましたので、かえって緑がないわけですが、そういうところから次第に植物、花や緑を楽しむという文化が育って行って、だんだんギリシャとか、ローマとか今日のヨーロッパ、イギリスに代表されるような西洋の園芸の楽しみ方が育っていきます。

じゃ東洋はどうだったかというと、別に西洋かぶれでガーデニングっていう横文字だからいつか西洋から勉強したんだろうということではなくて、これは全く違う流れで東洋にも観賞園芸が始まったと言われています。もちろんこれは大陸にその起源を持っているので、一番盛んだったのは宋の時代といわれています。中国は漢とか明とかいっぱい国の名

前がありますけれども、園芸がもっとも発達するのはこの時代らしいですね、960年から1279年の宋の時代に一番花や緑が盛んであったとこう言われています。ちょうど日本では平安末期から鎌倉時代の頃でして、この宋の中で良く流行った植物は牡丹なんだそうですね。牡丹が大変盛んになります。

◆わが国の園芸史（江戸園芸までの歴史）

我々の国を見てみますと日本独自で生まれた文化もありますけれども、大陸から色々なものが入ってきます。植物を觀賞する文化っていうのもおそらく大陸から入ってくるうちに日本独自のものと一緒になってものが生まれてくるのではないかとされています。例えば日本だと桜を觀賞しますね。染井なんかは江戸で非常に盛んになります。ところが中国っていうのは桜は園芸化していないんです。中国も日本も野生種、桜はあります。日本にも大島桜とかですね、たくさん野生種がある。中国にもヒマラヤ桜とかたくさんあるんですよ。しかし中国では園芸化されていません。

園芸化というのはどんなことかという、色々な品種が作られていくということですね。日本では独自の觀賞対象や觀賞方法ができあがる以前は、中国の植物に当てはめて身近な植物を觀賞したんじゃないかというようなこともいわれていきます。ちなみに中国で園芸化されたのは梅です。梅は觀賞用の植物として中国で発達しますが、日本には奈良時代にですね、初めは見る植物というよりは医薬品とか実梅（みうめ）ですね、実梅としておそらく入ってきたといわれています。次第に梅の花を觀賞するということが入ってきますので、人々は身の回りで梅を觀賞したいわけですが当然日本には梅はありません。従って花としてよく似ているような桜がですね、だんだん梅の代わりに觀賞の対象になったんじゃないかなといわれています。

これはずっとその後も続くことで、江戸時代にも「大和本草（やまとほんぞう）」なんていう農業書がありますけれども、この「大和本草」っていう本草書の、いわゆる植物図鑑ですね、見本は李時珍（りじちん）という中国の人が書いた「本草綱目（ほんぞうこうもく）」という中国の植物図鑑ですね。この中国の植物図鑑に書いてある植物を、日本の植物にあてはめようあてはめようとして作ったのが、貝原益軒が作った「大和本草」という植物図鑑になるわけです。

中国、中国という日本人としてさびしいところもありますけれども、大陸から色々な文化が来て日本人がそれに当てはめて独自の文化を創ってきたと、こういうことであります。そのことは別にわたしが言っている訳じゃなくて、2ページから3ページに書いています中尾佐助先生というたいへん著名な先生が、「花と木の文化史」という本に書かれています。そうこうするうちに鎌倉時代からだんだん日本でも觀賞の園芸が盛んになってくるんですけども、初めは我々一般の庶民ということじゃなくて本当に一部の貴族がそういうものを觀賞しているわけですね。

だんだんそれが年月を経るに従って武士を含めた上流階級が教養として園芸を嗜むようにな



ります。江戸時代の直前に流行っていたものは椿です。豊臣秀吉は椿をずいぶん集めたと言われていまして、これは当時の貴族の嗜好を真似たものと言われております。当時の貴族はずいぶん椿を愛していたとこういうことであります。

◆三代将軍が生んだ江戸園芸

ここいらあたりから急に変わってくるのは、江戸幕府ができることです。江戸幕府ができて徳川の三代の将軍がたまたま三人とも植物大好き人間だったので、江戸の園芸が大変発達をしてくるようになります。将軍という当時の頂点に立った人がまず自らやりはじめたということと、色々なことがありましたけれども徳川の300年間で、世界の歴史の中で見ると比較的平和で安定した時代が長く続きます。そのおかげで日本独自の園芸というのが発達をしていきます。

■江戸園芸の特徴

この江戸の園芸というのが世界の園芸文化の中でどういうことかということ、先ほど中国の宋で非常に発達をしたといいますけれども、中国の宋の時代、そして今日のイギリスを中心とするヨーロッパ、そして日本の江戸時代というのは三大園芸文化といってよろしいくらい素晴らしい園芸文化が開いたといわれています。これも中尾佐助先生の書物に書かれていますように、「江戸期の日本の花卉園芸文化は全世界の花卉園芸文化の中で、もっとも特色のある輝かしい一時期である。」ということで、これは当時、後ほど出てきますけれども、幕末に訪れた青い目の人たちがですね、当時の日本を見て本当にびっくりしちゃうんですね。もう大変なことだということで、驚いたという記録が残っています。

◆変わり葉へのこだわり

それでは江戸園芸ってどのような特徴があったかということが重要ですね。これはまた皆さんの興味にもつながると思うんですけども、ひとつは「変わり葉へのこだわり」です。

最近観葉植物ってありますね、横文字でいうとオーナメンタルグラスなんて言いますが、何のことはない日本だとススキっていう雑草なんですけれども、これがヨーロッパにいくと改良されてオーナメンタルグラスということで装飾用の草花になったりしますね。どうも日本はどんどん雑草になっちゃうものだから、みんな嫌われるんですけども。エノコログサなんかも雑草ですけどもこれも考え方によってはとてもきれいなフラワーアレンジの材料になります。

この葉っぱに美しさを発見したのは、西洋人ではなくて日本人が初めてなんです。日本人が初めて。幕末に訪れたヨーロッパの人たちが「葉っぱに何でこれだけ興味を持っているんだ」ということを驚いています。例えばゼラニウム。ゼラニウムってよくプランターなどに植えて楽しめますね。ペラルゴニウムというのが正式な学名です。ゼラニウムというのはもうちょっと葉っぱが柔らかい別の属のものがあります。あのゼラニウムも、ヨーロッパの人は花を觀賞するために色々な改良をしていきます。ところが日本に初めてゼラニウムが入ってきたのは江戸時代末期だといわれているんですけども、入ってきた植物の葉っぱの違いを一生懸命觀賞しているんですね。で、葉っぱの美しいものばかり

集めてしまう。

当時ゼラニウムはモンテンジクアオイ(紋天竺葵)という名前と呼ばれておりました。要するに色々な斑が入ったり、紋が入ったり、モンテンジクアオイということで楽しまれておりました。

◆たおやかな美しさへのこだわり

それから2番目の特徴は「たおやかな美しさへのこだわり」ということです。ヨーロッパに行きますと、花でも一重から八重とか大きい花を、とこういう風になります。葉っぱもこう立派な葉っぱ、と。

ところがどうも日本人は自然の中からまれに生まれてくる特殊な形を「芸」というんですね、芸といいまして珍重して弱々しく育てにくい個体を大切にするというたおやかさ、を尊重するような美意識というのを持っていたといわれています。

後ほどビデオで出るかもしれませんが、変化朝顔というのがあります。変化朝顔はビデオで見ると結構立派ですけども、植物個体自身は全然立派じゃないんですね。わたしの母親は85才になるのですけれども、彼女の家に変化朝顔の種を播いていたら病気にかかっているといっって引っこ抜いちゃったのですけれども、葉っぱなんか縮れていますし、決して立派じゃないんですね。その立派でないものを非常に珍しいということで大切にしているところがあります。

よく園芸の世界でいうとですね、今ちょうど東京ドームでらん展をやっていますけれども、園芸は時として自然を破壊することがあります。山に行くと大切なものを採ってきたりしますから、ということで生物の多様性を破壊するとか言われているのですけれども、日本人は種の中にある多様性を大切にしたいという歴史を持っているんですね。同じ種類なんだけれどもその中のちょっとした弱々しいものもきっちり発見してそれを大切にしていって残していく、ある意味では最先端の生物多様性の保全です。

◆わずかな個体の変異の中から自然選抜、人間の技との組み合わせ

三番目の特徴はですね、基本的には交配ということで受粉させておしべとめしべで新しいものをつくるということではなくて、自然の中から選んでくるということも特徴なんですね。自然の中から山の中でほんのわずかな違いを見つけては、それを大切に品種として取り扱うという特徴もあるようです。次のページにいきますと、自然の中からわずかな違いを選ぶ、そしてたおやかな美しさということでいきますと、この品種を残しておくことって難しいんですね、4ページが一番上ですけども、実は人間の業との組み合わせなんです。

こんなことをやっている園芸というのは、日本の園芸しかないんですね。人間のわざとの組み合わせというのはどういうことかという、栽培方法に特別な技術とか工夫をしませんと、その品種が失われてしまうんですね。先ほど芸という話をしましたがけれども、芸をしなくなるといわれています。従ってその性質を残していくためには、人間がうまい栽培方法を見せてやらないといけないということがあります。

ここまでいくとやや特殊な世界になりますけれども、斑入りの植物がありますね、白い斑が入っている、あれもずっと入っている訳じゃなくてですね、伝統園芸の世界に「のち

はぜ、のちくらみ」という言葉があります。こんなこと全然覚える必要ないんですよ。「のちはぜ」というのはですね、「後冴え」とも言いますが、栽培している後から斑が入っちゃうんですよ。途中で突然変異は起こらないですから、そういう性質なんでしょうね。栽培して少し大きくなっていくうちに斑が入るんですよ。

「のちくらみ」っていうのは反対に栽培していくと斑が入っていたのがだんだんなくなる、そんなことも品種として認めてやる訳ですね。だから個別の色々な植物を育てるために、色々な工夫をしているんですよ。南天の種類にキンシナンテン(琴糸南天)というのがあります。これは非常に細い葉っぱですね、キンシナンテンなんかはやや「からめ」につくらないと芸をしないとされています。

「からめ」につくるということは、あまり水をやらないということですね。ところが水をやらないとすぐ枯れてしまいますので非常に難しいですね。というのを江戸っ子たちは非常に膨大な時間と労力をかけて技術を創造したとこういうことですね。

◆植物観賞のための装飾や作法の存在

それからだんだんまたすごくなるんですけども、植物観賞のための装飾とかですね、作法があったということで、これはすべてにあったわけではないですが、現在でもオモトなんかは観賞のためのオモト専用の鉢がありますけれども、色々な植物に専門の鉢があったといわれています。もうほとんどなくなってしまっていますので、朝顔なら朝顔、それからサクラソウもですね、特別な鉢があったと、こういうふうにいわれています。

それから入れた器だけじゃなくてそれに対してその植物をどうやって見るかということで、3つくらい大きな要素があるんですよ。ひとつは植物自体に求められる形っていうのが、どうもあるんですよ。いくらきれいで整っていても、ある一定のルールを満たしていないとこれはダメと、いうことを決める訳ですね。

例えば肩が上がっていなければダメだとか、詳しいことはよくわかりません。2番目は、決められた鉢に入れて後ろに金屏風を置いて見ろとか、しつらえの仕方ですね。それから3番目にはですね、今度は人間の側ですね。正座して見ろとか、懐紙をくわえて刀と同様に息をかけちゃダメとか、こういう観賞方法も出てくるわけですね。こんなとてつもない文化をつくる訳です。今、茶道とか華道というと、「道」がついていますが、まさかこういうのは(片手でお茶を飲む仕草)茶道っていいません。でも園芸もですね、実は華道、茶道以上の厳しいしきたりというのが本来あったので、それは今現在ほとんど忘れられてしまっています。もちろんすべてがすべてではありません。

日本は茶道をやっているからといって、普通にお茶を飲むのは茶道とはいいいませんけれども、園芸もそうでした、非常に裾野が広く広がった園芸がすべてそのような格式ばった園芸で、じゃあ江戸っ子はみんな正座して植物を見ていたのかと、そういうことではありません。ただしそういうものすごいお師匠さんのレベルの高等な園芸もあったと、こういうことでございます。

◆園芸書の出版などの知識と教養への結びつき

それからですね、また西洋と比較してすごいのは園芸書などの出版ですね、浮世絵にも出てきますけれども、その栽培のための園芸書、今もガイドブックとかたくさん出ていま

すけれども。

ちょっとここでPRで、パンフレットを持ってくるのを忘れましたけれども、今度NHK出版で「バラ百科」という本が出ます。今ちょうど書店で販売の予約をしていますけれども、この「バラ百科」は上田善弘先生と河合伸志という二人の監修になっておりますが、この河合伸志というのがうちの社員でございます、バラの育種をやっておりますけれども、またご覧いただければと思います。ちょっと脱線。

この園芸書が多いわけです。今NHK出版の話をしましたけれども、今でこそ印刷技術が発達しておりますから原稿さえ書いて写真を撮れば済みますが、これでも大変なんですよ。この河合君がこの「バラ百科」を書き上げる為にうちの会社がつぶれるくらいのエネルギーを投入する訳ですね。当時木版でそれだけの園芸書をつくるということは大変なことだった訳でありますけれども、色々な図譜、そして銘鑑なんていうのが出ますね、銘鑑というのはちょうど大相撲になぞらえて東の大関西の大関ということで、この品種が一番すごいというようなことをやっていくわけです。

◆遊び心を前提

それから、何がすごかってこの植物につけられた古典文学等の名称ですよ。最近はこちら、この中には植物を生産されている方はおられないですね、北区だからないでしょうね。だったら言いますけれども、今はいい加減に植物の名前を付けちゃうから、奥ゆかしくないんですよ。「白熊君」なんて名前の植物があります。「白熊君」というのはサルビア・アルゲンティアナという植物ですね。スタキスという属で通称ラムズイヤーといってウサギの耳みたいに、触ると非常に気持ち良いんですけども、それに似ていてちょっと違うやつですけども、「白熊君」なんてあだ名を付けまして、要するに白熊の耳に似ているというようなことで名前を付けるんでしょうけれども、全然興味がございませんけれども。

昔の人たちはですね、大体二つの名前の付け方をしております。ひとつはその植物個体の特徴を表しているようなことを付けていますね、のちほどちょっとお見せしますけれども、「麒麟角」なんていって、麒麟という想像する動物の角に似ているということで、「麒麟角」という名前を付けました。それからもう一つは完全にいわゆる文学とかこういったものから付けてくるわけですね。これは決して大名とかが付けている訳ではなくて、普通の生産者の人、普通に楽しむ人たちがそういう品種名を付けているわけですね。

ということで、寺子屋が発達していたこともありますけれども、当時世界の中で識字率というのは日本が一番だったわけですから、江戸時代は。かなりですね、江戸っ子たちが色々なものを遊びながらやっていたということがわかります。その次も同じなんですが、遊び心を前提としていますね、先日向島百花園にお邪魔しまして、佐原鞠塙（きくう）さんの6代目ですか？

大熊（会場参加者）

8代目

賀来

8代目？だそうですけれども、お聞きしたら初代の佐原鞠塙さんというのは1804年に向島百花園をつくったんですね。それはなぜかという、初代の佐原さんが御府内で、いわゆる江戸市中でオークションをやったらしいんですね、Yahoo!オークションみたいな。それは幕府にとって御法度なので、しょうがないから川向こうに行っただと、こんな話がありましたけれども。川向こうに行って何をやるかという、梅屋敷をつくるわけですね、それが百花園ですし、浅草にも「花やしき」って名前の遊園地が残っていますけれども、あれは江戸時代の名残ですね。そういう遊び心を前提にどんどんどんどん広がっていくわけです。

◆身分を超越した広がり

それから最後に実に園芸ということで当時は階級社会ですから、士農工商とかですね、そういうものがありますけれども、園芸を通じた身分を超越した広がりというのがあります。例えば町人で「繁亭金太」という方がいますけれども、この方は斑入り植物、斑の入った植物が大変好きで集めるわけなんです。植木屋さんなんです。集めていたら、水野という旗本がいて、お殿様が。この人がパトロンになってお金を出して「草木錦葉集」という図譜、園芸書をつくるかですね、好き者同士は境がないと。こういう広がりをしていたというのが、江戸の園芸の特徴であります。

また、下に中尾佐助さんの色々なことが書いてありますけれども、葉っぱとか、たおやかな芸とか、人間との組み合わせとか、遊び心とか、そういうものが江戸の園芸の大きな特徴なわけでございます。

■将軍から庶民への300年

◆徳川家康から始まった江戸園芸

ではこういう江戸の園芸がどういう形で300年間に渡って発達してきたか、またそれがその頃西洋はどうだったかをお手元の資料でご説明したいのですが、まずは徳川家康から始まった葵三代というのがありますね、この資料をご覧いただきたいのですが、ここにも書いていないことがいっぱいありまして、これは静岡県で展示会をやったときに作った冊子からコピーしたんです。これも静岡の人も知らなかったの、わたしがこういう風なということをお教えしてあげてつくったものなわけですけれども。

ここにちらっと書いてありますけれども色々なおもしろい話がありまして、徳川家康は自分が植物が大好きだったものですから、植物を集めたり維持をするわけですが、それは天下の将軍ですから自らやることもありますけれども当然家来たちにやらせるわけですね。家来にやらせるわけですので、一番そういうことがわかっている人間は誰だということで、ここに書いてありますように、駿河の国、丸子（まりこ）の小野寺というところのお坊さんが召し出されます。彼が江戸城、駿府城の庭の整備をしていく、という形になります。

ここで丸子の宿というのは、今の静岡市から安倍川を西に渡ったところです。とろろいものおいしいところですね。この丸子の宿の小野寺というところの人間を引き抜くわけですね。芥川正知って書いてありますけれども、初めから芥川って名前が付いていた訳じゃなくて、召し出された後に芥川という名前を徳川家康からもらいます。で、芥川正知もし

くは芥川小野寺といいますね。これがずーっと続いていって、幕末の時にこの芥川がどこにいたかという、わかります？小石川植物園。小石川植物園というのは幕府の御薬園、薬用植物園なんですけれども、あそこに奉行が二人いたんですね。その奉行のうちの片方が芥川家です。ということで幕末まで続くわけですね。徳川家康が妙に植物好きじゃなくて召し出されなかったら名もなくその辺で終わっていたのですけれども。

◆続く二代の将軍も花好き、大名が献上する珍しい地方の植物

徳川秀忠、第2代将軍になってきますと、もう大坂の冬の陣、夏の陣も終わって徳川の天下がかっちりしてきますので、そうなりますとですね、だんだんですね、諸国の大名に命じて色々な植物もってこい、とこういう指示をするわけですね。これは徳川家康の時にもありまして、徳川家康の時には島津の殿様がハイビスカスを持っていったといわれています。東京の公園や庭園でソテツありますか？

会場参加者

小石川植物園にはあるわね。

賀来

ありますね。ソテツなんかもたぶん江戸時代に南の方から献上されたものだと思いますね。

例えば岡山の後樂園に行きますと、あれは池田のお殿様、池田輝政のお庭ですけれども、あそこにもソテツの林があります。あれもおそらく江戸時代に南から持ってきたものだと思いますが、次第にそういうことが盛んになりまして徳川秀忠はですね、江戸城下に御花畠というエリアを作りまして、そこに椿の珍花を集めます。

それから三代の徳川家光という人がこれがまた盆栽好きで、自分の寝る箱枕の中に小品盆栽を入れて寝ていたというくらい大好きなんです。徳川家光の遺愛の松というのが現在皇居の中と東京都立園芸高校にあるとこういわれています。それぐらい好きでありました。

それから三代の徳川家光という人がこれがまた盆栽好きで、自分の寝る箱枕の中に小品盆栽を入れて寝ていたというくらい大好きなんです。徳川家光の遺愛の松というのが現在皇居の中と東京都立園芸高校にあるとこういわれています。それぐらい好きでありました。

◆大名の庭園づくり（1600年代中ごろから）

こういうふうな三代の将軍が植物好きということになりますと、ごまをすりに大名とかが植物を自ら持っていったりするようになってくるわけですね。今度はそういうことと同時に幕府もだんだん制度がしっかりしてきますから、参勤交代という制度が始まることになります。参勤交代は1635年以降ですね、2年のうちの半分ですから1年、交代で江戸に住めとこういうことになります。となると、江戸にお屋敷を造るという必要が出てきまして、それから悪いことに1658年に明暦の大火があります。で、江戸が燃えちゃう訳ですね。

それ以後あまりにも家が密集していると危ないということで火除け地なんかを作られるようになります。いわば都市計画ですね。空き地を作ったり大名の屋敷もなるべく広くとって火事が類焼しないようにしようと。そうなると当然庭が出てきますので、単純



に將軍に植物を差し上げるだけではなくて、自らも植えて楽しむ、あるいは場合によっては植えているお庭に、よそのお殿様とか將軍に来てもらうというようなことも次第に出てきたのではないのでしょうか。

◆生業としての種樹家（造園家、植木屋）の始まり（1600年代後半）

そうこうするうちにですね、そこになりわいとしての種樹家(しゅじゅか)、造園家さん、植木屋さんですが、大体1600年代の後半から植木屋が生まれてきます。もちろん京都はもっと古くて室町時代くらいから植木屋さんがあったところいわれていますけれども、江戸の植木屋は1600年代の中頃からです。どういう形で江戸の植木屋が出てくるかという、たぶん初めは大名庭園に手入れに入っていた人間だと思うんですね。ですからひょっとすると植木屋さんの出自はかなり怪しい忍者のようなものかもしれません。

つまり服部半蔵は御庭番といわれますよね。ですから忍者の系統になるかもしれませんね、造園の人は。伊藤伊兵衛といって豊島区の郷土資料館に資料がございますけれども、何代かにわたって活躍した植木屋さんが生まれます。この伊藤伊兵衛というのは藤堂高虎のお家に入出入りしていたといわれるんですね。藤堂高虎邸というのは、今の六義園です。柳沢吉保の前が藤堂高虎で、その前は加賀藩の屋敷と聞いています。

当時の藤堂高虎邸に伊藤伊兵衛というのがお手伝いで入ります。お手伝いに入ると、次第に余ったものなんかを持って帰るわけですね。あるいはもう持って帰っていいぞ、みたいな感じで。それを自分のうちで今度は増殖するわけですね。増やす。どうやって増やしたかは知りませんが。種なのか挿し木なのかわかりませんが。この伊藤伊兵衛の屋号が何というかという、霧島屋というんです。霧島ツツジなんですね。

ですから、そうやって長く考えてみると、徳川家康あたりがはじめにやりはじめて、珍しいものを持ってこいということで、島津のお殿様などが植物を持っていきますよね。とおそらく熊本の細川さんとかその辺の南の方の大名が霧島ツツジを献上したんだと思います。献上したら大名にお裾分けとかがなされる。手入れをしていくうちに余るものが出る、余っていて自分のところで引き取っていく、引き取って増殖をしていく、で、はじめは大名、旗本に売っていたんですけれども、さらに余ってきますから、これがだんだん一般の人に広がっていくんですね。

その広がるきっかけが1700年代の花見です。徳川吉宗が花見のために飛鳥山とかをつくりますね、これが大体1700年頃なんですよ。皆さんは花見のことはよく知っているですよ。でも花見が江戸の園芸事情と絡んでいるというのはあまりよくご存知ないですね。はじめは大名の庭の植木から始まるんです。植木がだんだん一般庶民に広がり、花見が盛んになる、じゃあ帰りがけに一本買って帰るか、と。というような形でさらに売り物が増え、だんだんそのような機会が増えてくるわけですね。ですから1700年代くらいからは庭でなくとも楽しめる草花が嗜好されてくるということになってきます。

◆庭園用の樹木から草花への嗜好（1700年代）

ちょっとこの辺でこっちの資料を見ていただきたいんですけど、もう一回振り返るとですね、一番はじめは寛永の椿です。1615年から30年くらいに大流行ですね。おそらくこの頃1600年というのを今振り返ってみると、これは決して庶民には広がってないです

ね。お偉いさんたちの道楽としての椿であろうと思います。こっちの横長（資料2）を見るとですね、非常に面白いんですね。英国（西洋）と書いてありますけれども、この17世紀というところをご覧いただいたらいいんですねけれども、1630年代にオランダでチューリップバブルが起こるんですよ。チューリップバブル。日本は株のバブルですが、オランダでチューリップのバブルが起こるんですね。チューリップ1球がですね、途方もない値段がつくようなチューリップバブルが起こります。

それからもう1回この縦長を見ていただくと、元禄の頃はツツジです。1600年代後半ですね。これはさきほど申し上げました伊藤伊兵衛なんかが活躍した頃ですね。ツツジがブームになっています。

それからですね1700年代になりますと先ほど申し上げましたように、花見を通じてだんだん庶民も園芸を楽しめるようになりますね。そこで庶民で楽しむとなると、皆さんふと気がつかれると思うんですね、鉢植えがいいんですね、鉢植えは。庭がない人は大きい樹木を楽しめない訳ですね。大体1700年代から今度は鉢植えの草ものが出てくるんですね。ということで正徳の菊、こっちの横長でいくとですね、1710年代にまず京都で菊がブームになります。それから1710年代の後半には江戸でもブームということで、こういった菊が盛んになります。

◆こだわりの園芸（1700年代後半から）

まだこの頃は樹木と草ものが一緒に流行ります、交互に流行ります。次のこっち側のページを見ると、享保年間1716年から1736年くらいですが、今度は楓がブームになりますね。それから今度は一番下に寛政の橘とありますが、1787年なんですが、これ橘というのは間違いですね、正確にはカラタチバナです。

カラタチバナというんですね、この左側に図が出ていますが、今でも園芸店でお正月の前後になりますとカラタチバナって売っていますけれども、あれはなんの変哲もない普通の品種ですね。このカラタチバナが一大ブームになりまして、一番貴重なものですね、ひとつで2300両の値段がつきます。1本で今日の1億円の値段がつく、で、それを買う人がいるっていうんだから。それぐらいキチガイのようなブームになっていくわけです。

またこっち側を見ていただくと、この横の表を見ていただくと、どんな風に世の中が変わっているかというところ見ていきましょうか。18世紀というのは1700年代なんです、今申し上げましたように、菊に始まりまして、楓がブームになったり、それからだんだんこだわりでサクラソウ、とかですね、マツバラなんていうのが盛んになります。

マツバラ、これですね。こっちの一番後ろに出ているこれです。これはシダの植物のひとつの仲間なんですけど、日本人はこんなもの集めて楽しんでるんですね。先ほど名前で麒麟角と申し上げましたけれども、これです。今日は実物を持ってきました。麒麟角はこれですね。これ麒麟角。わたしそんなにマニアックじゃないです。ちょっと仕事柄やらないといかんと思って勉強したんですね。これがマツバラですね。

会場参加者

花は咲くんですか？

賀来

花は咲きません。シダの仲間です。これなんかは本当は懐紙をくわえて観賞しないといけないんですね、人の脂をものすごく嫌います。これも種類が 50 種類くらい、で別にこれとこれを組み合わせて交配して新しい品種をつくれる訳じゃなくて、自然の中での違いを選んできてこうやると。こんなものが流行るわけですね。ちょうどこれ見ていただくと、何かそんな感じかなと思うでしょう。この個体はあんまり「作(さく)」が良くないですね。うちはアパートなもんだから日差しが斜めなので本当はやっぱり上から差した方がいいですね。このマツバラなんか種類によって日が強い方が良く、暗い方が方が良いものがありますね。

さきほど「のちはぜ」とか「のちくらみ」という話をしましたが、紺性が強いというのですが、紺性が強いというのは緑っぽいのが強いんですね。緑っぽいものが強いのに光を当てすぎると今度はその芸をしなくなるとかですね、あるいはキンギョクとかキンツクモという種類は、逆に太陽の光を当てませんと黄色にならないんですね。

そんなのを種類に分けていちいち江戸っ子たちはやるわけですね。ただし本当に良いものまでどこまでこだわっていたかというのはよくわかりません。ま、そんなことでマツバラが流行りまして、1790 年代には第一次の百両金で書きますが、金のなる木、カラタチバナですね。

それからそれを右側に見てもらおうとですね、そのころイギリス、イギリスというと NHK の番組でも植物王国なんていっていっぱい出ていて、これは大したものだと思うんですが、実はイギリスなんていうのは本当に植物の少ないところですから、元々は植物層が非常に貧弱なところなんです。単純なものです。日本みたいに藪にならない。それを世界からあれだけたくさんの植物を集めてきたんですね。ちょうどこのころに一生懸命集めている訳でありまして、「1700 年代後半イギリスで栽培業者が出現」「1700 年代後半にイギリスのキュー植物園等が組織的な植物収集を開始」と書いてあります。

先ほど言いましたように、日本は種樹家の三代目伊藤伊兵衛が活躍したのが 1690 年代、しかるに向こうは 1700 年代後半ということですから日本は産業という意味でも非常に進んでいたんですね。

◆庶民園芸と超高度な園芸（1800 年代）

次に 19 世紀 1800 年代になりますと、先ほどお話ししました佐原鞠塙さんが向島に百花園を開園しております。新梅屋敷ですね。このころヨーロッパがどうだったかという、先ほど王立園芸協会の話をしたけれども、1804 年にようやく 7 人の会員で英国王立園芸協会の前身に当たりますロンドン園芸協会ができたということで、まだまだ日本が進んでいるということですね。

1800 年代になりますと、まず変化朝顔が流行ります。朝顔というのも当然流行るのですが、その中の変化朝顔が流行ります。その変化朝顔の面白い種をもらいにわざわざ成田屋さんっていったかな、名前は忘れましたが、鬼子母神辺りに住んでいた人が浪速まで取りに行って交換しているっていうんですからね。種を。向こうでも珍しいのを咲かせた奴がいるというので。じゃあもらいにいくべえって、行っているっていうんですからす

ごいことです。

それから第二次の百両金、カラタチバナ、それから紫金牛というのはヤブコウジ。ヤブコウジも非常に盛んになりますね。それから福寿草。福寿草なんていうのは非常に縁起が良いですから、大体埼玉の山奥に生えております色々な福寿草を探してきます。1810年代には染井で菊人形の見せ物ということで、日本発フラワーショーがスタートするわけですね。イギリスを見ますと1833年にフラワーショーの前身の展覧会がスタートしたということですから、日本のがまだフラワーショーを先にやっているんですね。

それから1830年代はサクラソウ、ハナショウブ、マツバランがまたブームになってきて、幕末を迎えるわけです。ここにハナショウブが出てきましたので、ちょっとハナショウブのことを申し上げますと、先ほど観賞の作法というような話を申し上げましたけれども、観賞の作法があることによって、そのハナショウブ自体の発達が変わってくるんですね。ハナショウブにはもちろんいろいろな種類がありますが、ひとつは江戸系のハナショウブっていうのがあります。それから肥後系ですね、肥後。それからもうひとつは伊勢系です。

江戸のハナショウブっていうのは基本的には地に植えて観賞しますので、そうすると花はちょっと上から見てきれいなものが良いものということで選ばれるようになります。肥後系のハナショウブっていうのはですね、畳のところで床の間に鉢に植え、裏側に金屏風を立てて正座をして観賞しますので、やや目線からちょっと下がったくらいのもので良いものということで、選抜されるんです。そのときには葉っぱはですね、花の高さを越えてはいけなとかね、非常に細かいルールがあるんですね。

それから伊勢のハナショウブっていうのは、完全に下垂する芸です。垂れ下がります。イセナデシコっていうのが後ほど出てきますけれども、こう、下がりますね。ただ、伊勢ナデシコは一回途絶えていますので、現在復興していますけれども江戸時代のものそのものではありません。つまり観賞の仕方とかルールによって植物の形、ひいては選抜の方向性が違ってくるということですね。

それからハナショウブっていうところで出ましたのでついでに申し上げますと、肥後のハナショウブっていうのは満月会という会がありましてそこから外に出さないということでやっているのですけれども、元々は松平菖翁って言って松平定朝という旗本がやっていたものなんですね。細川のお殿様がですね、松平定朝という江戸にいた旗本に、そのハナショウブを分けてくれという話をするんですよ。そうすると分けるのは嫌だ、と言ったのでどうしたかという、吉田某という家来を松平定朝のところに研修に出すわけですよ。

2年くらい行って勉強してこい、と。で、勉強して、分けてもらって、肥後に持って帰るわけですね。で、それがいまだに肥後で続いているんですね。その分けてあげたときの条件として決してみだりに人に渡しちゃいかん、と言っているもんですから、満月会はいまだに外に出さないんですね。こんなこだわりがあります。

お手元の縦長のメモに戻っていただきますと、1700年代、先ほど花見と併せまして園芸が次第に一般化していくわけですが、その中で生まれてくるのがこだわりの園芸、ですね。繰り返しになりますけれども、サクラソウ、マツバラン、オモト、ハナショウブ、変化朝顔、カラタチバナ、ヤブコウジ、フクジュソウ、フウキラン、チョウセイラン、こういったものが盛んになります。

また、ここには書いていないんですけれども、タンポポですね。タンポポっていうと大体今話題になりますのは、カントウタンポポとかカンサイタンポポという自生種に対してセイヨウタンポポが入ってきて、交雑して良くないと言われるんですけれども、当時はタンポポを自然の中から品種として選んでいたんですね。赤いタンポポとか白いタンポポがあったといわれています。これはもうほとんど絶滅しましたけれども、タンポポも園芸化しておりました。そういうかなり品種、品目にこだわった園芸が発達をしていきます。

また、武士の中にもですね、先ほど松平定朝の話をしましたけれども、こだわりの人たちが出てくるわけです。松平定信(1758年～1829年)はご存じの通り寛政の改革に登場した中心人物です。寛政の改革に失敗するわけですね、最終的には。失敗した後、この欲恩園(よくおんえん)というのを、欲恩園は今も地名で残っているんですかね、下町の霊岸島っていうところですよ。霊岸島に欲恩園という植物園を作りまして、蓮、梅、桜、椿なんかを収集したと。おそらく大名植物園の中でもこれが一番でしょうね。チャンスがあったら一度これ復元をするとすごいことになりますけれども。

だから日本国の総理大臣はですね、改革に失敗したら引退して庭園をつくって植物をやる。というぐらいになると品格のある国になるわけですね。定信さんは失脚してですね、その後は植物それから単に自分で植物を集めるだけじゃなくてちゃんとその図譜を作るわけですね。「欲恩園真景」とかですね、お庭の様子、それから「欲恩春秋両園桜花譜」いわゆる桜の色々な品種を図譜にして残す、こんなこともおやりになります。

また、松平定朝というのは、ハナショウブの菖に翁(オキナ)と書きまして菖翁(しょうおう)といわれるくらいハナショウブ大好き人間なんですけれども、大変立派なお花をつくります。たぶん松平定朝のハナショウブなんかは自然選抜じゃなくて交配していると思います。交配してつくっているんですけれども、この中に現在でも秘花と呼ばれているものが生き残ってまして、「宇宙(おおぞら)」とかですね、「不背の玉(ふはいのたま)」とか、「獅子奮迅」とか、「月下の波」という秘花があります。今ハナショウブは、現代品種も含めて2～3000品種あるといわれていますが、その中でも秀逸のハナショウブを作るわけです。

また、水野忠暁は、斑入り植物、斑が入った植物ということで、集め、また、先ほど言いましたように繁亭金太という植木屋さんと組んで、「草木錦葉集」を出版していくということで、1700年代後半から1800年代の前半にかけてですね、もうきちがいみたいな人が出てくるわけですね。こういう風を集められた江戸の品種が現在まで全部残っているかという、残っていない方が多いです。定朝の「宇宙」とか「不背の玉」とかですね、むしろこれらは残っています。ただし多くの園芸品種はなくなりましたし、それから草木錦葉集とかですねこういった図譜に描いている植物も、もうなくなったものが多いです。

椿の葉っぱは普通こういう形をしていますよね。ツバキには金魚葉という葉っぱがあるんですよ。金魚の尾っぽみたいにですね、これは普通に売っています。金魚葉の黄斑、黄色い斑が入った椿というのは今のところまだ出ていない。黄色い斑が入ることはあるんだけど、あれはウイルスでしょうね。ウイルス斑というのがありますからね。いわゆるばい菌が入って黄色くなっているのはちょっと違いますので、そうではない斑が入る。これは図譜には描かれていますけど、今はないといわれます。

それから変化朝顔なんかはですね、変化朝顔というのは、これまた難しいのですけれど

も変わった朝顔が出ますよね。それに種がつくものにつかないものがあるんですよ。親木と出物がありましてこの親木からは一定の変化朝顔がある確率で出てくるわけですね。それを江戸っ子たちは知ってしまして種を縦横に播いていくわけですね。そうすると何分の一の確率で変なのが出るとよく知っているわけですね。進化論ということでメンデルの法則というのがあります、エダマメじゃなくてエンドウ豆で一定の確率でどーたらこーたらというのがありますが、それよりも遙か前に江戸っ子たちの方がメンデルの法則を知ってしまして、変化朝顔でこの親木からはこの一定の確率で出物が出てくると。で、それを繰り返していくわけです。

ところが変化朝顔の図譜の中に載っているやつでいまだに出ないのがあるんですよ。いまだに出ないのがある。だから30年50年100年くらい播き続けるとそのうち出るかもしれない、と。ただし出たとしてもそれはたぶん種は取れないから、どの組み合わせで出たかということ的全部記録して行って、やらないといけないかもしれません。ま、こんなバカみたいなこだわりを見せていくんですね。

1800年代はこだわりの超高度な園芸がある一方で、庶民に幅広く植物や園芸が普及をするという、江戸は一大パラダイスといえますか、庭園都市になってしまして、これが日本の特徴なんですね。後ほど外国人が驚嘆した江戸のまちっていうのを話し申し上げますけれども、当時イギリスで園芸が盛んになったからといって、やっていたのはやっぱり王侯貴族たちであって、一般の人たちがそんなに花を楽しむってことは考えられなかったんですね。で、日本の場合には、もう本当に世界の人びとがびっくりするようなきちがい園芸といえますか、超高度な園芸といえますか、それが発達しながらですね、かたや、もうまちの隅々まで季節に応じて、じゃあちょっと朝顔買ってくるか、とかですね、こっちには何が植わっているわというのが発達したというのが日本の園芸の特徴で、人類広しといえどもここまで達成したことはないんですね。

残念なことに第二次大戦以降特にですね、そういうことが失われてきましたけれども、我々にはそういう遺伝子が入っていますから、またこれ300年くらい時間をかければですね、やれないわけではありませんよ、ということをお話しておきたいと思えます。

このマツバランですね、色々工夫して育てるんですね。色々な作り方があると思うんですよ。私の場合には何を使っているかという、桐生砂と富士砂、この黒いのは富士の溶岩ですね。これをいくつかにふるうんですよ。ふるって粒度を分けます。で、もちろん大きいものから積み上げて三層くらいに積んでいって一番上は小さいのが積んでありますね。それと一番上には化粧、化粧砂を敷くわけですね。これは良くないサンプルなのですが、そこまでみんなしていたということですよ。しかもそれをほうき目で、こうやってきれいにならすというんだからすごいですよ。これはたまたまこういう鉢ですけども、本来マツバランは楽鉢（らくばち）の方が良いですね。もうちょっと軽い割れそうな鉢がありますよね、京都なんかで作っている。その方が通気性が良いから楽だと思えますけれども。

皆さんこれをやってくださいというんじゃないですが、坂梨先生というNHKの「趣味の園芸」によく出演されておられる先生にもこのお話しをしていたら、「そうなんだよね、最近の園芸っていうのはふるいをやらないんだよね」と。ふるいっていうのは、土を振って粒度に分けるってことですね。昔はみんなそうやっていた。で、マツバランは先ほど言いましたように、人の脂を嫌うし、金属を嫌うから本来は竹の箸でやるんですよ、これ。

これなんか本当にまともな作のものは、懐紙をくわえて見る作法に該当するでしょうね。人の脂を嫌うから。ま、そんなことまでやるんですが、要は何を言いたいかということ、江戸の園芸の中には、今日我々が学ぶべき色々な要素が入っているという点です。

つまり、本来園芸をやるための基礎的な、土はこういう土が良いのか、とか、しかもその地方地方に独特の土がありますので、どういう組み合わせが良いのかということもよくよく研究していますね。オモトなんかは朝明砂（アサアケズナ）か、軽石の粒度調整をしたものに、桑の炭を間にはさんで植えますね。桑の炭ってものすごく軽くて中がスカンスカンなんですよ、桑の木は。だからオモトの根がまとわりつきやすいんですね。そんなのも経験値で彼らはずーっと長い間に勉強してくるんですね。

それを全部の園芸に応用しようという訳じゃないけど、なるほど土が大切だね、とかです、なるほどそうこだわる訳じゃないけどちょっと器を替えると良いですよ、とか、これは最近のインテリアの園芸なんかにも出てきていますが、それから植物の名称も大切だよ、とか、そういう学ぶことがたくさんありますし、それから、これから申し上げる、それらの園芸を楽しむ技術がずーっと延長線としてまちがきれいになっていくというところにつながるということが非常に重要なところなんですね。

■外国人が驚嘆した幕末の江戸の園芸

◆外国人が驚嘆した園芸の発達

ここで外国人が驚嘆した江戸の町と人というところに行きますけれども、1800年代の後半はこだわり園芸はあり、庶民園芸はありということで、日本を訪れた外国人たちがびっくりして帰っていくわけです。5ページにシーボルトの江戸参府紀行、先ほど帯笑園の話をしましたけれども、その文章がこの5ページの下であります。

それから6ページに、ラザフォード・オールコックの「大君の都」という幕末に来た外交官ですけれども、こんなこと書いていますね、「日本人は偉大なしろと園芸家であって、……いかなる日でも、花売りが美しい商品をもって歩き回る姿を見ることができ。」ということで、単なる社交辞令としてこう言っているわけではなくて、たぶん観察すると花売りとかですね、皆さんが園芸をやっているということが非常に目についたと、ということではないかと思うんですね。

こっちの浮世絵の絵でいきますと、(資料4)1ページ目になりますけれども、植木屋さんがですね、こういう台に乗せて植物を売りに行っている浮世絵ですね。これ、ぼてふり（棒手振り）っていいです。棒手振りで担いでいったんだと思うんですね。おそらくそれなりの売り声があったんだと思うんですよ。売り声があって、ちょっと名前は忘れちゃったけれども、どなたか江戸の売り声を集めている方がいらっしゃるんで、そのCDなどで植木屋編がないかどうか、ちょっと調べてみようかと思えますけれども。こういったものに入れて売って歩いていた訳ですね。

それから次のページを見ますと、こういう色々な鉢に色々な植物が植わっていますね。今日は鉢もひとつ持ってきたんですが、朝寝坊をしまして申し訳ありません。もちろん浮世絵というのは、今日でいうところのお写真、ポスターですから、良いシーンを撮っている訳ですね。良いシーンを撮っているから、すべてがすべてこんなきれいな状態とか、全員こういう着物で歩いていた訳ではないですけれども、こんなシーンが世

の中にあっただであろうと。

それから次のページですが、これは染井だとか団子坂だとか、そこら辺りでやったと思うんですけども、植木屋さんがですね、やったフラワーショーです。この左側がフラワーショーの目玉作品、百種接ぎ分け菊で、ひとつの菊の、おそらく台木はヨモギだと思うんですけども、それにですね、百種類以上の菊を接いで開花をさせるということです。

これは浜名湖でもやりましたし、これがなぜすごいかというと、当時は今みたいな温室はないわけですし、当然菊によって性質が違うのと開花時期が違いますよね。それを合わせて同時にこうやる、と。でなおかつ同時にこれをして木戸銭を取るわけですから、これは江戸っ子は大したもんだと思いますね。

それから次のページですが、商品を販売する棚の絵ですけども、良く見ていただくと、オモトみたいなのが並んでいますね。それからたぶんこれはマツバランだと思いますよ。それから足もとのところに芝生があるでしょ。今のホームセンターじゃないけれど、芝生を束にして売っていたんですね。まさか大名がこういうところに来て「これくれ」っていう訳じゃないから、当然買っていた人は庶民なんですよ。ムクゲもありますね。

それから次のページは、縁起物の福寿草ですね。福寿草は園芸品種としてどのくらいありますか、一般に売っているのは。3つか4つでしょうか。チチブベニ（秩父紅）とか、

会場参加者

オレンジのと、黄色のと。

賀来

2～3種類ですね。当時おそらく福寿草は50品種ぐらいありましてね、今隠れて栽培している人でも30あるのかなあ。これ良く見ていただくと、花の形が縮れているじゃないですか。しかもそれに合った鉢を作って観賞していたということですね。



◆園芸家ロバート・フォーチュンの見た江戸

こんな江戸であります、もう一度縦長に戻っていただいて、6ページに、園芸家ロバート・フォーチュンの見た江戸っていうのが書いてあります。ここに一番重要なことが書いてあるわけですね。

ロバート・フォーチュンというのは、先ほどのラザフォード・オールコックとかシーボルトと違ましてまさに園芸の専門家です。専門家ということは、ある意味では本当に公平に見ていますから、例えばわたしがどこかヨーロッパの美術館に行って「わーきれい」と言っただけで、美術の専門家じゃないから単純にきれいと言って感動しているだけなんです。でも園芸家が見ているということは、比較対照をきっちりやって見えていますので、信頼できると思います。

このロバート・フォーチュンがなぜ日本に1860年代に来たかといいますと、英国王立園芸協会から日本のアオキの雄木を採ってくるようにいわれて日本に来ます。アオキはご存

じのように雄と雌が違うんですよ。従って当時イギリスにはアオキの雌しか行ってなかったんですね。だから赤い実をつけなかった。従って雄木を採ってこいといわれて日本に採りに来るんですね。で、ものの見事に採集に成功します。なぜ成功したかという、実はシーボルトも日本からずいぶん植物を持って帰っております。ただ日本から当時のヨーロッパに行くまでには赤道を2回通りますので、ほとんどの生きた植物は枯れてしまいます。従って種とかで行ったものは発芽しておりますけれども、生きた木そのものはなかなかうまくいかなかったんですね。

ところがこのロバート・フォーチュンの時にはですね、運ぶ温室みたいなもの、ウォードの箱、ウォーディアンケースというのがありまして、木で作った枠があってそれにガラスがはめ込んであるんですね。これに入れて無事生きたまま帰ることが出来た、つまり暑くても露がついて中であんまり蒸発しないというようなことで、帰ったんですね。

これはまたすごいことにですね、ロバート・フォーチュンは2回来ているんですけれども、1回目はしようがないから自分で持ってきたものですね、2回目に日本に来たとき、日本人がそのケースをつくって中に植物を入れて買わないかと言ったというんだから、日本の人は早いんですね。鉄砲と同じですよ。

それとついでに脱線して、今、箱の話をしてしまいましたが、当時ガラスが工業化されたことがそういうものができた背景なんですね。昨年「愛・地球博」がありました。愛・地球博というのは万国博覧会なんですから、この1回目の万国博覧会というのは、1851年にロンドンで開かれているんですね。

ロンドンで開かれた1回目の万国博覧会の一番の目玉の展示はですね、実は植物なんです。それは今もキューガーデンという植物園に残っておりますクリスタルパレスっていいまして大温室があって、つまりイギリスの当時の技術でガラスを使ってこれだけ立派な建物が出来ると、というのは万国博覧会の驚きだったんですね、まずは。

それからその温室の中に当時のイギリスの力で七つの海から植物をふんだくって飾ってみせるというのはこれはまた目玉だったわけですよ。そんなことがあったり、それから明治の初期には、テラリウムって知ってます？ こういうガラスのケースにシダなんか入れて飾る置物なんかあるじゃないですか。あれがイギリスで大流行するのが、1800年代後半、1900年代ですね。で、日本からシダなんかずいぶん持って行かれちゃいます。ま、そんなことが背景にあるわけですから。

本題に戻りますと、ロバート・フォーチュンが来て日本を見た様子がここに書いてあります。まず一番目は、斑入りの植物について書いてありますね。「ヨーロッパ人の趣味が、変わり色の観葉植物と呼ばれる・・・日本では千年も前からこの趣味を育ててきたということだ・・・その多くは非常に見事である。」とこんなことが書いてあったり。

それからすごいのはその次なんですから、2行目染井村ですね「随行の役人が染井村にやっと着いたと報せた。その村全体が多くの苗樹園（ガーデンセンター）で網羅され、それらを連絡する一直線の道が一マイル以上もつづいている。」1マイルということは1.6キロくらい、1.6キロガーデンセンターがずっと続いているっていうんですから、今さすがに埼玉でもないですよ、これ。そこに数千の植物が栽培されていると。

当時江戸の人口は、幕末で約100万人。100万人に対して1.6キロメートルのガーデンセンターが供給する植物ということは、今よりも遙かに植物をよく使っていたということ

ですよ。遙かにみんな植えて楽しんでいたと、こういうことだと思います。

それから7ページ、この辺が美しい景観のことなんですけれども、非常に見事な生け垣がですね、道端に広がっていると、それはよくイギリスの貴族の庭園や公園で見かけるようなものだというぐらいきれいに管理している。

それから向島で彼がいった景色なんですけれども「江戸の町が眼前に広がって、ひととき美しい絵のようであった。その場所全体がまるで一大庭園であった」というような美しいところであったと。そして最後にですね、当時は階級社会ですのでこういう表現になっていますけれども、「日本人の国民性の・・・下層階級でもみな生来の花好きであるということだ。」

当時イギリスなんかで産業革命で工場で働いている人なんかは花なんかやらないわけですよ。ところが日本人はみんなやっていると。「気晴らしにしじゅう好きな植物を少し育てて・・・イギリスの同じ階級の人たちに比べると、ずっと優って見える。」ということでもあります。

当時ですね、こういうロバート・フォーチュンだとか、これは園芸の専門家として来た訳ですが、彼らは決して単一の目的で来ている訳じゃないんですね。ある意味では外交上のスパイの目的ももってきておりますから、いわゆる日本をせめて中国のように植民地化したほうが良いのか、彼らは教養と文化があるからつきあった方が良いのか、という情報が色々な形で持ち帰られる訳ですね。

おそらくたぶんこういう記録もですね、これがどういう本かということですね、「江戸と北京」という名前なんです。ロバート・フォーチュンは江戸に来た後、北京に回っています。北京の描写はこんなもんじゃないですよ。とても良くない。すなわちその辺にもですね、イギリスが日本をどういう風に取り扱っていくかということも入っていたのではないかと推察されるわけがあります。

そろそろ皆さんもお疲れになってきたと思いますので、ここで最後にビデオをご覧いただきたいと思います。これは浜名湖花博の園芸文化シアターというのがありまして、そこで上映していたものであります。シナリオを私の方で制作し監修をしてつくったものでございます。

ビデオ 「大江戸花暦」（浜名湖花博）

先ほどからご説明した江戸の園芸というのはですね、かなりの部分、特に植物は絶滅した部分があります。ただ一部には残っておりますし、このビデオでありましたように世界に誇るべき文化遺産として残していったらいいなと思います。また、先ほどから申し上げておりますように、またビデオにもありましたように個別に植物を楽しんでいるだけではなくて、それが大きなまちとか住んでいるところが非常にきれいになって、外国人がびっくりするということですので、最近総理も高速道路を移転して日本橋をもう一回復活しようかななんて話もありますけれども、ぜひ花と緑で往事の江戸みたいなものを復原できたらいいなということです。

ちょうど一番最後は高層ビルのああいう感じですけども、本当は六本木ヒルズに入って成功を治めた方なんかも、ちょっとこけてる方もいらっしゃいますけれども、ああいう方はちゃんとお庭を作っていて植物をやって、そういう人が一生懸命やれば、またどンドンドンドン増えていくということなんですね。六本木ヒルズの場所というのは、元々長州藩の下屋敷なんですね。ですからおそらくこの時代は大変立派なお庭だったでしょうし、あそこの再開発組合の理事長さんはですね、江戸時代から続いた金魚屋さんなんです。だから僕はできたらホリエモンじゃなくて金魚屋さんの中に入れた方がよっぽどね、おしゃれなまちになったかなんとかいうふうに思っております。ちょっと2時間になりましたけれども、「江戸の園芸」ということでお話しをさせていただきました。どうもありがとうございました。



質疑応答

何かご質問がある方は、気軽にどうぞ。

Q： 質問ではないのですが、盆栽の国風展が今年も終わりましたが、大きな鉢の添え物を見たりすると、自然の風景の中に自分が入っていくような感じがして、本当にああいうものは良いですね。日本人に生まれて良かったなと思います。

A： 盆栽の世界でいうと、添えにしている草は、言い方を間違えると誤解をされるといけませんけれども、割と草もの、葉ものはちょっとばかにしちゃうんですよ。葉物園芸とか言って。これを見ていただくとわかるようにですね、実は元々是一緒だったんですよ。もともとは鉢植えで始まったことで、今もう一回また盆栽も一緒にやるといいですね。

Q： 生け花と同じようなことで、添え物の小さな鉢が置いてあるのではないかと思うのですが。

Q： 添え物の草だけでも毎年きちんきちんと作って、今年作ったものではないんです。十年も前から作っているんです。

Q： ああいうものでももう年数が経っているんですね。



A： 石菖（せきしょう）なども江戸に発達した植物で、田沼意次が病にふせった時にですね、田沼意次は賄賂の政治でしたから、彼が病気で倒れたときに、石菖盆（四角い水盤みたいなものに石菖を植えたもの）が壘いっぱい献上されたというような、そんな草ものの歴史もあるんですね。

Q： わたしは花博にも行ってきたんですけども、花博では藤をメインにしていた時期があったと思いますが、スライドにも藤が出てきました。藤というのは、江戸園芸の中でどういう位置付けだったのでしょうか。

A： あまり藤自身は園芸化されてはいないと思います。いわゆる園芸植物みたいに多品種作られている訳ではないですね。

Q： 最近まちなかにも古い藤の木が結構あって、街並みを考えるときにおもしろい植物かなと思っているのですが、ただ花が咲いていないものも結構あるので、藤の花を咲かせるためにはどういう管理がいるのかな、と。

A： 藤の花は、枝の先端ではなく基部に花がつくので、枝を長く伸ばしていてもあまり花はつきません。毎年冬休眠したら根元から4～5節残して剪定をすると、花付きが良くなります。

A： 今園芸化されなかったということで誤解をされるといけないんですけども、藤は多品種あったわけではないのですが、当時日本にあってシーボルトが持って帰ったも

ので、今は日本にないものもあります。センジャク（千尺）という白い房がとても長い品種ですとか。それから今は交配して作っていますから、1年で花が咲くものとか、中国のフジをかけたよい香りがするものもあります。

Q： 去年、一昨年に変わり朝顔を何種類か植えたのですが、結局若葉は出てもそれから育たなくて花がつきませんでした。変わり朝顔は最近盛んなのでしょうか。

A： 盛んですね。盛んというほどどうかわかりませんが、佐倉にある国立歴史民俗博物館の「暮らしの植物苑」で、変化朝顔を取り扱い始めたのです。今年も種を分けて頂いたりするのではないのでしょうか。

Q： 育て方が難しいのでしょうか。

A： 難しいです。さきほど申し上げたようにやっぱり弱々しいです。わたしも種をもらって播きましたけれども咲いたのは1つで、まじめにやれば良いのですが意外と難しいです。非常に小さくて弱いです。

Q： 咲いても、本当に弱くて、一日二日でもってだめになってしまうとか成功しない。

A： 映像で見ると堂々としているような感じがしますが、そんなことないです。ちっちゃいですよ。非常に弱いです。ですから途中でうまくいかないことが多いですね。なかなかお答えにならなくて申し訳ありません。

Q： 結局はいっぱい花を咲かせたいなら一般的な朝顔を栽培した方が、普通の素人には良いのでしょうかね。

A： そうですね。変化朝顔は大きくなってもこの程度で、通常の朝顔みたいには絶対に伸びていきません。下手をするとこれくらいの朝顔がありますからね。これくらいでチリチリチリっと、こんな。それ以上伸びないものもあります。変化朝顔はまじめにやりはじめると非常に危険ですね。危険な植物です。集めたって毎年やらなくちゃいけませんから。

Q： どうせやるんだったら朝顔はたった一輪だけ咲かすとか、そういう楽しみ方もありますよね。

A： 大輪の朝顔で、団十郎という名前が付いている茶色の、歌舞伎役者の衣装と合わせた名前をつけたり、そういう粋なところがたくさんあります。

Q： 菊は白が強いのでしょうか。隣に紫色とかエンジとかの鉢を置くとみんな白くなっちゃうんですね。

A： 白が強いということは特にはないと思うんですけども、当然ランナーというか走出枝が出て下から芽が増えてきますから、当然浸食していくのはあるでしょう。赤だと思って育てたものが実は隣の白がはびこって白になっているということもあるでしょうね。

A： 品種の強い弱いはありますからね。

司会： それではだいぶ長時間になりましたが、今日はこの辺でお開きにしたいと思います。全体で3回から4回を考えておりまして、今日がその第1回目です。第2回目は上の中を歩いて、お二方に色々サジェスションを受けながら路地の園芸を発見して歩きたいと考えています。それと、ある路地に焦点を当てて、その園芸について皆さんでワークショップをやりたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。

北区まちづくり公社： 3月11日(土)のまちづくりフォーラム「未来のまちづくりを担う子どもたちのために」、区民によるまちづくり活動報告会（北とぴあ）のPR

会長： 今日はお忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。これから2回3回と回を重ねることになりますが、北区の花川区長も言っている花いっぱいということ等で、区役所関係、まちづくり公社関係等のご協力をいただきましてうちの町会が日本一になる路地をめざしてがんばろうということでございますので、協力をぜひよろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。

参加者

上十条一丁目町会	10名（路地協会員1名）
十條あすみの会	2名（路地協会員2名）
路地協会員	2名（上記を除く）
(財)北区まちづくり公社	2名
北区役所	1名（北区まちづくり部十條まちづくり担当課）
講師	2名（(株)グリーンダイナミクス 賀来氏、片山氏）
路地協事務局	1名（木村）

配付資料	1 路地園芸プロジェクト講演要旨「世界一の江戸園芸」（添付）
	2 日影の園芸文化略史（添付）
	3 葵三代の園芸ほか
	4 浮世絵等
	ワークショップ案内リーフレット